

平成17年12月1日発表

平成17年産水陸稲の収穫量

——— 収穫量は前年比6%増 ———

【調査結果の概要】

鹿児島県における平成17年産水陸稲の収穫量は、水稻が12万500 t、陸稲が108 t、水陸稲合計では12万600 t となり、前年産に比べ6,400 t（6%）増加しました。

これは、水稻の作付面積は200ha減少しましたが、作柄において、早期栽培は作況指数105となり、普通栽培では台風の影響と登熟期の天候不順及び病虫害の発生等の影響により作況指数95となったものの、前年産に比べると作柄が良かったためです。

第1表 平成17年産水陸稲の収穫量

区 分		作 面 付 積	10 ^a 当 たり 収 量	収 穫 量	作 況 指 数	前年産収穫量との差	
						対 差	対 比
水 陸 稲 合 計		25 900	—	120 600	—	6 400	106
水 稲	平. 17 水 稻 計	25 800	467	120 500	98	6 400	106
	早期栽培	6 360	459	29 200	105	△ 700	98
	普通栽培	19 500	469	91 500	95	7 300	109
	16 水 稻 計	26 000	439	114 100	92	—	—
	対前年差	△ 200	28	6 400	—	—	—
陸 稲	平. 17 陸 稲 計	48	225	108	...	△ 14	89
	早期栽培	37	232	86	...	△ 7	92
	普通栽培	11	200	22	...	△ 7	76
	16 陸 稲 計	60	204	122	...	—	—
	対前年差	△ 12	21	△ 14	...	—	—

注:1 普通栽培には、二期作を含みます。

2 計と内訳は、ラウンドのため一致しない場合があります。

【解説】

1 水 稲

(1) 早期栽培

ア 作付面積

作付面積は6,360haで、前年産に比べ160ha（2%）減少しました。

これは、農業従事者の高齢化等による不作付地の増加や宅地への転用や「米政策改革による水田農業ビジョン」の取り組み等が行われたことによるものです。

イ 作柄概況

田植最盛期は、育苗期間の低温により、平年より2日遅い4月2日となりました。

苗の活着（根付き）は、初期生育が低温により緩慢であったものの、その後天候に恵まれことから、平年並みとなりました。

茎数は、5月上旬以降が高温・多照に経過したことから、県内全域で分けつは旺盛となり、特に主要作付地帯の大隅半島地帯は多くなりました。

出穂最盛期は、初期生育の遅れにより、平年に比べ2日遅い6月25日となりました。

穂数は、一部穂揃いの悪いほ場もありましたが、茎数が多かったことにより多くなりました。

1穂当たりもみ数は、主要作付地帯の大隅半島で、幼穂形成期の低温と穂数が多かったことによる補償作用によりやや少なくなったものの、その他の地帯では幼穂形成期に好天に恵まれたことにより、平年並み以上となりました。このため総じて平年並みとなりました。

全もみ数は、1㎡当たり有効穂数が多く確保され、1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから多くなりました。

登熟は、出穂後の日照不足に加え、全もみ数が多いことから粒の肥大がやや悪く、やや不良となりました。

被害は、梅雨後期の局地的な強風雨による一部倒伏や籾ずれがみられたものの、病虫害の発生が少なかったことから、平年に比べやや少なくなりました。

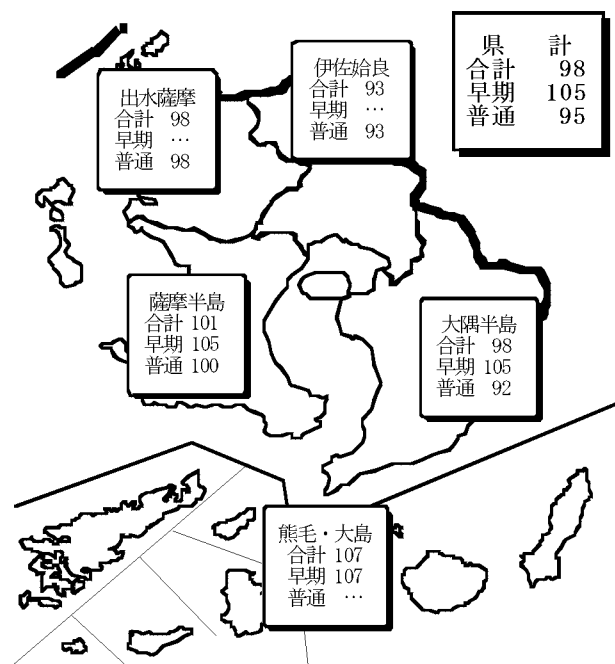
このようなことから、作況指数105となりました。

(2) 普通栽培

ア 作付面積

作付面積は1万9,500haで、前年産並みとなりました。

水稻の農業地帯別作況指数



これは、農業従事者の高齢化等による不作付地の増加や宅地への転用等があったものの、早期水稲からの作付変更等の増加があったことによるものです。

イ 作柄概況

田植最盛期は、6月上旬～中旬の少雨による用水不足の地域があったほか、近年の早植え傾向に対する適期定植の指導により、平年に比べ2日遅い6月18日となりました。

生育は、7月上旬の日照不足の影響で草丈はやや低く、茎数は地域でバラツキはあるものの総じて平年並みとなりました。

出穂最盛期は、田植え期の遅れにより平年に比べ2日遅くなり、8月27日となりました。

全もみ数は、1穂当たりもみ数はやや多くなったものの、穂数がやや少なかったことから、総じて平年並みとなりました。

登熟（実入り）は、台風第14号（9月5～6日）の影響、出穂期以降の日照不足、高夜温等の天候不順に加え、病虫害の発生も多くやや不良となりました。

被害は、台風及び出穂期以降の日照不足と9月中・下旬以降急激に広がったウンカの影響のほか、紋枯病・いもち病等が発生したことから、総じて多くなりました。

このようなことから作柄は、作況指数95となりました。

2 陸 稲

(1) 作付面積

作付面積は48haで、前年に比べ12ha(20%)減少しました。

これは、収益性の低下や収穫量が不安定であることから、生産意欲が減退しているためです。

(2) 作柄概況

早期栽培は、は種期以降、天候に恵まれ順調な生育となり、特に4～5月にかけて高温・多照・適雨となったことから、初期から中期の分けつが旺盛となり、茎数・穂数とも多く確保されたが、1穂当たりもみ数はやや少なくなりました。

登熟は、8月上旬～中旬が干ばつ気味で推移したことから、粒の肥大不良及び充実不足がみられました。

被害は、干害、いもち病、胡麻葉枯れ病のほか、カメムシの発生もみられました。

普通栽培は、5月中旬～6月中旬の干ばつ、7月中旬の日照不足により、穂数はやや少なくなり、1穂当たりもみ数は平年並みとなりました。

登熟は、出穂期の天候不良に加え、台風第14号の影響により、稔実不良、籾ずれ及び倒伏が発生し、やや不良となりました。

被害は、台風の襲来と紋枯病、いもち病の発生により平年に比べやや多くなりました。

このようなことから、陸稲合計の10a当たり収量は225kgとなりました。

3 水稲の被害概況

水稲合計の被害量の総数は2万4,100 t、被害率19.5%となり、平年に比べ4.5ポイント上回りました。

これは、主に台風や高温・日照不足等の影響による気象被害、紋枯病等による病害が多かったためです。

第2表 平成17年産水稲被害量

区 分	被 害 量 t	被 害 率		
		本 年 %	平 年 %	対 平 年 比 ポイント
総 数	24 100	19.5	15.0	4.5
気 象 被 害	9 250	7.5	4.8	2.7
うち、風水害	4 880	4.0	3.6	0.4
うち、日照不足	2 040	1.7
うち、高温障害	2 070	1.7
病 害	8 300	6.7	6.5	0.2
うち、いもち病	3 290	2.7	2.9	△ 0.2
うち、紋枯病	4 180	3.4	2.3	1.1
虫 害	6 100	4.9	3.4	1.5
そ の 他	479	0.4	0.3	0.1

注:1 被害率は、平年収量に対する被害量の比率であり、被害の程度を表す指標です。

2 気象被害のうち、「日照不足」「高温障害」については、平成14年より気象被害について表章区分の見直しを行ったことから、平年差を比較していません。

【統計表】

平成17年産水稲（作柄表示地帯別）

1 早期栽培

区 分	作付面積 ha	10a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 t	10a 当たり 平 年 収 量 kg	作 況 指 数	収 穫 量 の 対 前 年 差 t
県平均	6 360	459	29 200	436	105	△ 700
うち、 薩 摩 半 島	1 700	456	7 750	435	105	△ 180
大 隅 半 島	3 240	469	15 200	446	105	△ 500
熊 毛 ・ 大 島	1 170	438	5 120	408	107	10

2 普通栽培

区 分	作付面積 ha	10a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 t	10a 当たり 平 年 収 量 kg	作 況 指 数	収 穫 量 の 対 前 年 差 t
県平均	19 500	469	91500	492	95	7 300
うち、 薩 摩 半 島	2 900	471	13700	473	100	1 900
出 水 薩 摩	6 200	482	29900	491	98	3 000
伊 佐 始 良	6 650	476	31700	512	93	1 500
大 隅 半 島	3 720	434	16100	471	92	900

(参考1)

平成17年産水稲玄米のふるい目幅別重量分布状況
(概数値)

この調査は、飯用に供し得る玄米の全量を把握することを目的としていることから、収量基準は、農産物規格規定三等以上の品位を有し、かつ、ふるい目幅 1.7mm以上の選別された玄米の重量としています。

なお、農家等が選別に用いるふるい目幅は、1.80mmが多くなっています。ふるい目幅の重量割合とふるい目幅別10a当たり収量は次のとおりです。

単位 { 重量割合：％
平均対差：ポイント

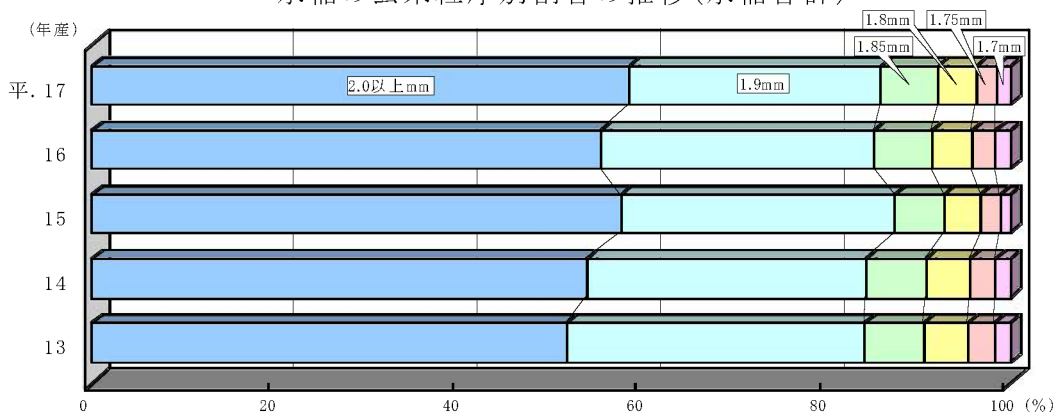
区分	合計	ふるい目幅					
		2.00mm	1.90mm	1.85mm	1.80mm	1.75mm	1.70mm
水稲合計重量割合	100.0	58.3	27.6	6.3	4.0	2.2	1.6
平均対差		2.7	△ 2.4	0.2	△ 0.4	△ 0.2	0.1
早期水稲重量割合	100.0	45.9	35.1	8.7	5.6	2.8	1.9
平均対差		3.1	△ 3.6	0.8	△ 0.1	△ 0.2	—
普通水稲重量割合	100.0	62.2	25.2	5.6	3.5	2.0	1.5
平均対差		1.2	△ 1.3	0.4	△ 0.2	△ 0.2	0.1

単位:kg

区分	合計 (1.70mm選別)	選別ふるい目幅別10a当たり収量					
		2.00mm	1.90mm	1.85mm	1.80mm	1.75mm	
		県計	467	272	401	431	449
地帯別	薩摩半島	465	233	388	422	445	456
	出水薩摩	481	289	422	448	464	473
	伊佐始良	476	321	422	446	462	470
	大隅半島	450	270	387	415	433	443
	熊毛・大島	438	133	323	377	412	428
作期別	早期栽培	459	211	372	412	437	450
	普通栽培	469	292	410	436	453	462

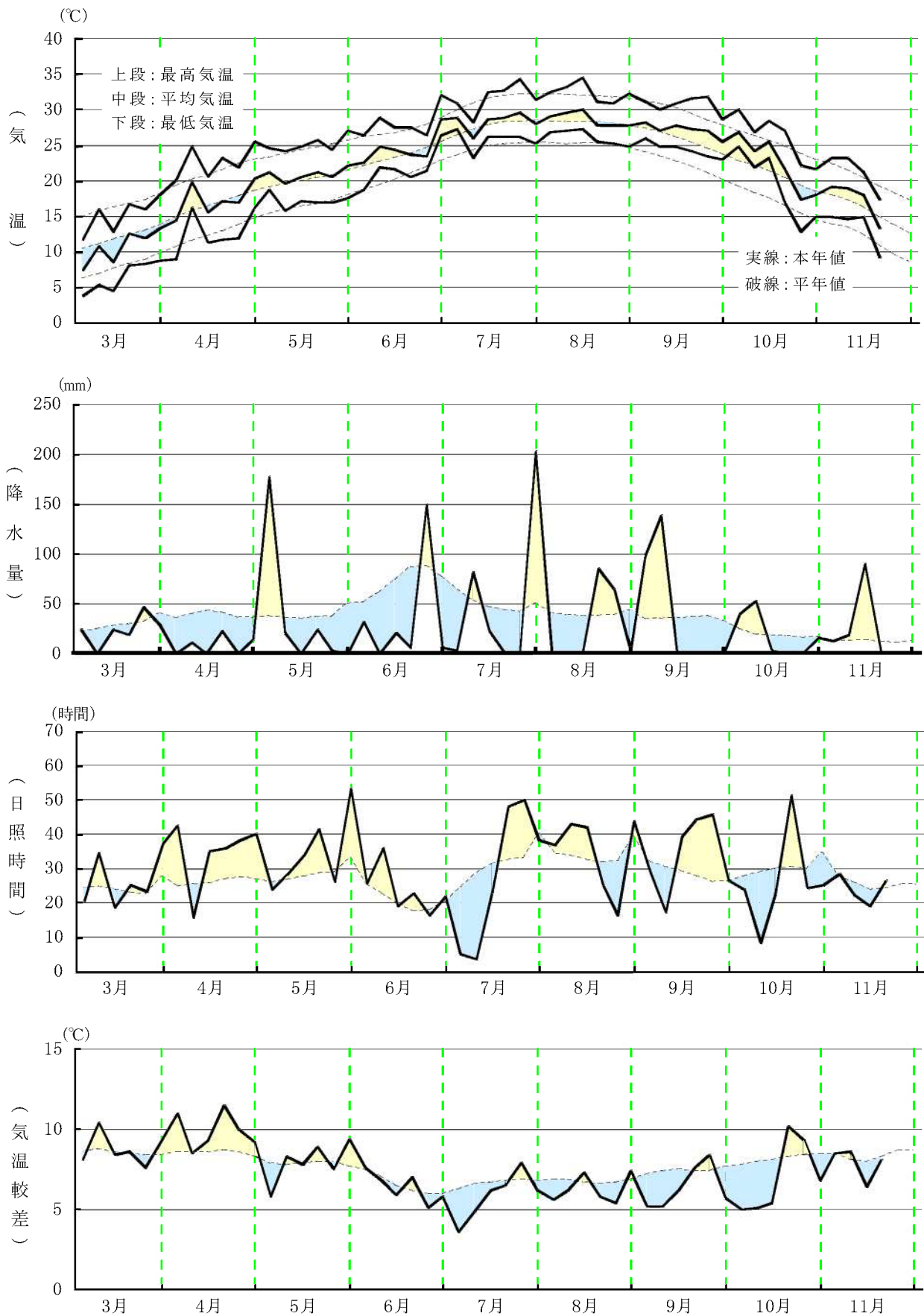
- 注:1 平均対差に用いた平均値は、直近3か年の重量割合の平均値です。
 2 選別ふるい目幅別10a当たり収量とは、表頭のふるい目幅を使用した際に得られる10a当たり収量の事です。
 3 台風等により未熟粒・被害粒等の混入が多く、農産物検査規格三等の品位に達しない場合は再選別を行っており、その選別後の値を含んでいます。
 4 表中の「△」は、平均より少ないことを示します。

水稲の玄米粒厚別割合の推移(水稲合計)



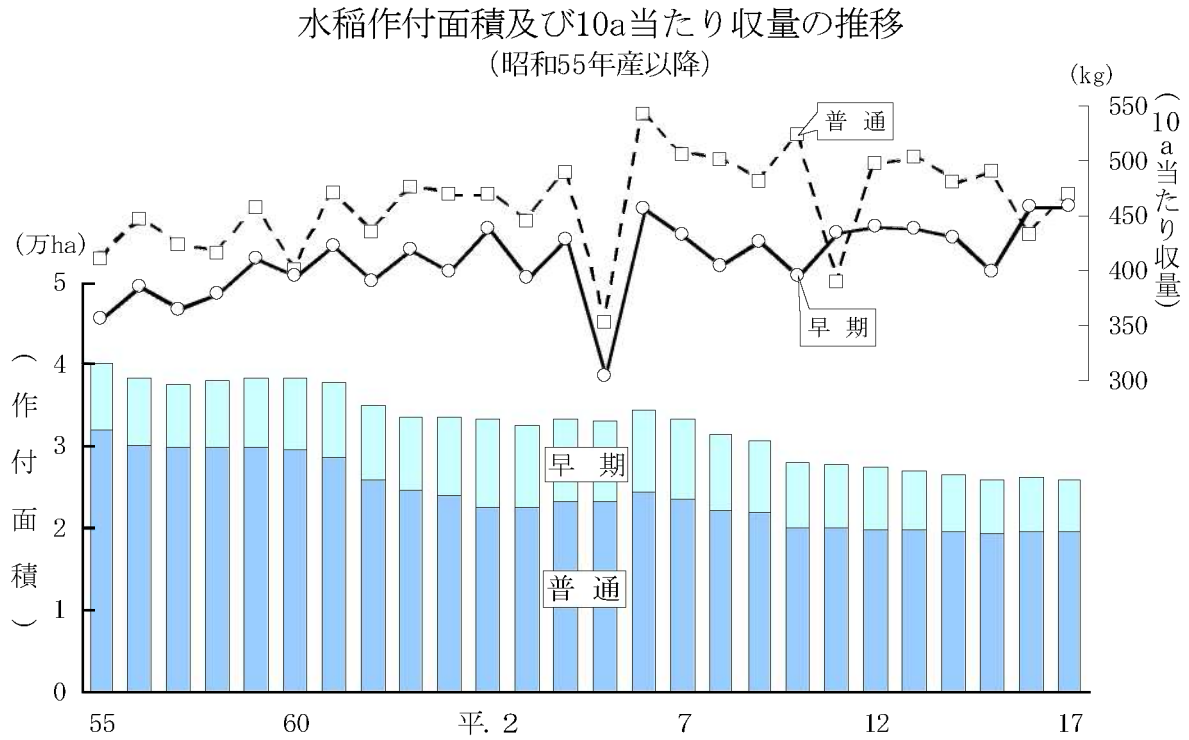
(参考2)

平成17年産水稻生育期間における鹿児島県の気象



資料：鹿児島地方気象台「アメダス気象データ」

(参考3)



【調査の仕様】

- 1 本調査は、作物統計調査の作付面積調査及び稲調査の中の水陸稲の収穫量調査として実施し、水陸稲の作付面積、作柄状況、予想収穫量を明らかにすることにより、生産対策、技術指導等の農林水産行政推進のための基礎資料とすることを目的としています。
- 2 作柄概況の地帯別は、主要作付地帯（1,000ha以上）を掲載しています。
- 3 作況指数とは、10 a 当たり平年収量に対する10 a 当たり収量の比率です。
- 4 統計表において、「穂数の多少」「1穂当たりもみ数の多少」「全もみ数の多少」「登熟の良否」で用いた表示区分は、各指標の平年値に対する比率であり、要旨及び解説に用いた作柄の表示区分及び地帯区分は、次のとおりです。

表示区分

区 分	良 (多い)	やや良 (やや多い)	平年並み	やや不良 (やや少ない)	不良 (少ない)
対平年比	106%以上	102%～105%	99%～101%	95%～98%	94%以下

地帯区分

- 薩摩半島 --- 鹿児島市、枕崎市、指宿市、日置市、いちき串木野市、南さつま市、鹿児島郡、揖宿郡、川辺郡
- 出水薩摩 --- 薩摩川内市、阿久根市、出水市、薩摩郡、出水郡
- 伊佐始良 --- 大口市、霧島市、伊佐郡、始良郡
- 大隅半島 --- 鹿屋市、垂水市、曾於市、曾於郡、肝属郡
- 熊毛・大島 --- 西之表市、名瀬市、熊毛郡、大島郡

5 統計数値のラウンド方法は、次のとおりです。

原 数		7けた以上 (100万)	6けた (10万)	5けた (万)	4けた (1 000)	3けた (100)
ラウンドするけた(下から)		3けた	2けた		1けた	ラウンドしない
例	ラウンドする前(原数)	1 234 567	123 456	12 345	1 234	123
	ラウンドした数値(統計数値)	1 234 000	123 500	12 300	1 230	123

6 用語の解説

- 早期栽培とは、出穂期の台風被害が作柄に大きく影響するので、台風の襲来しやすい8～9月に出穂となることを避けることなどから、8月末頃までに収穫する目的で作付けされている栽培方法です。
- 穂数とは、1㎡あたりに出穂したすべての穂の数です。穂数は収量決定に当たって重要な要素の一つです。
- 全もみ数とは、1㎡当たりの全てのもみ数のことです。収量決定に当たって極めて重要な要素です。
- 登熟とは、開花、受精したのち、実が肥大し熟れていくことを登熟といいます。稲の生育状態や気象条件、病害虫などの影響を受け、収量に直接関係します。
- 10a当たり平年収量とは、水稻の栽培を開始する以前に、その年の気象の推移や被害の発生状況を平年並みとみなし、最近の栽培技術の進歩の度合や作付変動等を考慮し、実収量のすう勢をもとに作成したその年に予想される10a当たり収量をいいます。
- 被害面積とは、農作物に損傷を生じ、被害なかりせば収量（その被害が発生しなかったと仮定した場合に取れ得ると見込まれる収量）から減収した面積をいいます。
- 被害量とは、農作物の栽培が開始されてから収納されるまでの期間に、災害等によって損傷を生じ、被害なかりせば収量（その被害が発生しなかったと仮定した場合に取れ得ると見込まれる収量）より減収した量をいいます。

次回の地方発表予定
12月中旬 かんしょの収穫量

連絡先：九州農政局鹿児島統計・情報センター
生産流通消費統計課 生産統計第2係
TEL：099(222)7546
FAX：099(224)1501

この資料は鹿児島統計・情報センターホームページ

【 <http://www.kagoshima.info.maff.go.jp/> 】

の「農林水産統計データ」でご覧いただけます。

E-mail kagoshima_info@kyushu.maff.go.jp

